第二章　鬚黒大将家の物語　北の方、乱心騒動

［第一段　鬚黒の北の方の嘆き］

内裏へ参りたまはむことを（姫が尚侍として御所住まい為さることを）、やすからぬことに大将思せど（帝のお手つきを恐れて、不安に大将は思ったが）、そのついでにや（六条院から御出になるこの際に）、まかでさせたてまつらむの御心つきたまひて（姫を自邸に退出させ申そうという腹が据わりなさって）、ただあからさまのほどを*許しきこえたまふ（ただ僅かな間ということで大将は源氏殿に出仕の許しを願い申し上げなさいます）。　＊「許し」は名詞、許可の意。鬚黒は源氏にお許しを願い申し上げなさる、意。と注にある。是は指摘されないと難しい。婚姻関係からすれば大将に許認可権がありそうだが、確かに姫の実際の管理者は六条院の主人である源氏殿には違いない。それも、太政大臣と大将では比べ物にならない身分差でもあり、職掌としても太政大臣は帝に直接関わる祀り事の中枢を担う。

かく忍び隠ろへたまふ御ふるまひも（このように人目を忍んで六条院に通いなさる御動向も）、ならひたまはぬ心地に苦しければ（自分には似合わない気がして大将は厭なので）、わが殿のうち修理ししつらひて（御自邸を手直しして姫の部屋を設けて）、年ごろは荒らし埋もれ（長年荒れたままで）、うち捨てたまへりつる御しつらひ（放って置きなさった御部屋飾りの）、よろづの*儀式を改めいそぎたまふ（全ての様式を新しく変えて迎える準備を為さいます）。　*「ぎしき」は＜記念行事の式次第＞でもあるが＜型式、格式、様式＞などのことも言う、らしい。

北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず（正夫人が嘆きなさるであろうお気持ちも考え為さらず）、かなしうしたまひし君達をも（可愛がっていらっしゃった御子たちでさえ）、目にもとめたまはず（目にも留めなさらず）、なよびかに情け情けしき心うちまじりたる人こそ（寧ろ優雅に風流を楽しむ気持ちを備えた遊び人であれば）、とざまかうざまにつけても（何かにつけて）、人のため恥がましからむことをば（人の身になって決まり悪く思うであろうことに）、推し量り思ふところもありけれ（気が回るものですが）、ひたおもむきにすくみたまへる御心にて（大将は目下の事案に一途に取り組みなさる御性分なので）、人の*御心動きぬべきこと多かり（信頼が急に裏切られたように、夫人の御気持ちが錯乱しかねないことが多かったのです）。　*「心動く」は＜心が乱れ騒ぐ＞。「ぬべし」は＜～してしまいそうだ、確かに～しそうだ＞と古語辞典にある。

女君（正夫人自身は）、人に劣りたまふべきことなし（何処と言って、人に引けを取りなさることはありません）。人の御本性も（その上品なお人柄も）、さるやむごとなき父親王の（あの式部卿宮という高貴な父親王が）、いみじうかしづきたてまつりたまへる（熱心にご教育申しなさったもので）、おぼえ世に軽からず（上流社会での評判も高く）、御容貌なども（お顔立ちも）、いとようおはしけるを（とても美人でいらっしゃるものを）、あやしう（奇異なことに）、執念き御もののけにわづらひたまひて（執念深い物の怪に取り付かれなさって）、この年ごろ（この数年は）、人にも似たまはず（本人らしくもなく）、*うつし心なき折々多くものしたまひて（正気を無くす時が多くお成りになって）、御仲もあくがれてほど経にけれど（ご夫婦仲も疎遠になってだいぶ経つけれども）、やむごとなきものとは（他ならぬ正夫人としては）、また並ぶ人なく*思ひきこえたまへるを（余人にあらずと大将は思い申しなさっていたものなのですが。）、　*「うつしごころ」は「移し心（変

わりやすい心)」ではなく「現し心(正気)」のこと、らしい。 *「思ひきこえたまへるを」の「思ひきこえたまへる」は「ほど経にけれど」という状況提示文を受けた大将の考えで、「を」は逆接の接続助詞なので、下文の＜大将の御心変わり＞を示す「めづらしう御心移る」に確かに主語は繋がるが、それ以下の文意が姫に対する大将の思いで、此処までの正妻に関しての話題とは繋がらない。従って、助詞の語法としては続き文にも見えるこの「を」を、下に「今はさにあらず」などが省略されたものと見做して此処に句点を打ちたい。

めづらしう御心移る方の(その大将が珍しく御心を引かれた方が)、なのめにだにあらず(並大抵の人ではない程の)、人にすぐれたまへる御ありさまよりも(人より美しい御姿であることよりも)、かの疑ひおきて(姫が源氏殿の愛人だったのではないかという、疑いを心に置いて)、皆人の推し量りしことさへ(世間の皆が在る事無い事噂していたことまでが)、心きよくて過ぐいたまひける*などを(姫が処女のままで六条院で暮らしていらっしゃったと、実感にせよ確信にせよ納得出来たことを)、ありがたうあはれと(尊いと身に沁みて)、*思ひましきこえたまふも(もっと嬉しく思い申しなさるのも)、ことわりになむ(尤もなことです)。 *「など」は曲者だ。古語辞典には＜他の類例事物の存在を示す副助詞＞とあるが、少なくも「心きよくて過ぐいたまひける」こと以外に類推されること、を意味しているとは思えない。「心きよくて過ぐいたまひける」ことこそが重要であり、それに類する他のこと＜など＞ない。また、こうした打消しを強調する副助詞の＜など＞でもない。となると、残るのは婉曲・曖昧表現の「など」で、性や生理に関する事柄なので少し遠慮して上品な言い方にしたのだろうか。私は違うと思う。作者は「心きよくて過ぐいたまひける」を客観的な事実として確定的に言うのを避けた、というより、さすがに確定的には言えなかったのだろう。さんざ思わせぶりな記事を書いてきて、今さら言えた義理ではない。ということもあるが、作者は女だ。女は処女出血が必ず有るものでもないことを身を以って知っている。もっと言えば、前戯の上手い男や女がその気になる相手なら膣液が良く出て痛くないが、無骨な大将なら出血したかも。で、大将は男だから、私もだが、女が、というより女房たちだが、それらしいことを言うとそうなのかと早合点する。というわけで、この＜など＞は大将が考えたであろう彼や是やの類推を示し、文意からしてそれらの類推によって大将は姫が「心きよくて過ぐいたまひける」と納得したことが書かれている、と私は思う。 *「思ひ増す」は彼と比較して是を＜もっと思う＞だが、何を「もっと」どう「思う」かと言えば、彼は「人にすぐれたまへる御ありさまより」で、是は「心きよくて過ぐいたまひけるなどを」だから、是を＜もっと＞「人にすぐれたまへる」と嬉しく＜思う＞のだろう。

式部卿宮聞こし召して(式部卿宮はこの事情をお聞きなさって)、

「今はしか(今はそのように)今めかしき人を渡して(新しい夫人を移り住まわせて)、もてかしづかむ片隅に(引き立てようというその片隅に)、*人悪ろくて添ひものしたまはむも(人に劣った形で添え物のように我が君が暮らしなさるのも)、人聞き*やさしかるべし(世間体が悪いだろう)。おのがあらむこなたは(私が生きている間は)、いと人笑へなるさまに従ひなびかでも(そんな物笑いになるような形で大将に付き従わずとも)、*ものしたまひなむ(我が君には他所で、お暮らし頂きます)」 *「ひとわろし」は普通＜みっともない、外聞が悪い、体裁が悪い＞という形容詞のようだが、此処では「くて」と状態説明の＜～という形で以って＞を意味する接続助詞の「て」で、「添ふ(主たるものに付随する)」を修辞しているので、＜「みっともない」状態であること＞を以って＜「付随している」こと＞になるという読み方では、本末転倒で意味が通らない。私は、此処の「人悪ろし」は＜人に悪ろき＝人に劣った待遇＞のことを言っている、と文意からして思う。 *「やさし」は＜痩す(やす、やせる)の形容詞化。肩身が狭く身も痩せるような思いであるというのが原義＞と古語辞典にある。「人聞きやさし」は「人聞き(世間の耳目)」が「やさし(痩せる思いで辛い)」だから、ほぼ「人悪ろし」と同じで＜世間体が悪い＞だ。先に「人悪ろし」という語を変則的に使ってしまったので、こういう

言い方を取ったのだろう。 *「ものしたまひなむ」の「ものしたまふ」は主語が北の方で＜(他所で)暮らしなさる＞だが、「なむ」は話者たる父宮の強い意向を示す係助詞で、下に＜思ひ給ふる＞などが省略されたもの、かと思う。これが、北の方に対して直接言った言葉なら「ものしたまへ(帰って来なさい)」と命令形になりそうな文意だが、実際には宮は自分の妻か家人にでも言った言葉なので「ものしたまひなむ(お暮らしなさるようにする→暮らして頂きます)」という言い方になった、のだろう。

とのたまひて(と仰って)、宮の東の対を払ひしつらひて(宮邸の東の対を掃除整理して)、「渡したてまつらむ(我が君には、当家にお戻り頂こう)」と思しのたまふを(とお考えになって仰るのを)、「親の御あたりといひながら(親の里とは言え)、*今は限りの身にて(今や進退窮まった立場で止む無く)、*たち返り見えたてまつらむこと(出戻りで御会い申し上げるとは)」と、思ひ乱れたまふに(北の方は思い悩みなさって)、いとど御心地もあやまりて(ますますお加減が悪くなって)、*うちはへ臥しわづらひたまふ(ずっと長く病床に臥せっていらっしゃいます)。 *「今は限り」は＜もう此れきり＞という他に手立てが無い切羽詰った状態の語感。 *「たち返り」は「絶ち帰り」で＜遊びの里帰りではなく、二度と大将家には戻らない覚悟の里帰り＞という意味だろう。その敗北感が悔しい。だから、「見えたてまつらむこと」の下に＜いと口惜し＞が滲む。 *「うちはへ」は「打ち延へ」で＜ずっと続く→長い間＞。

本性は(北の方の生来の気性は)、いと静かに心よく(物静かで素直で)、子めきたまへる人の(その子供のような純真さが)、時々(時として)、心あやまりして(気が触れて)、人に疎まれぬべきことなむ(夫に疎まれてしまうことが)、うち混じりたまひける(何度か在ったのです)。

［第二段　鬚黒、北の方を慰める（一）］

住まひなどの(北の方の暮らし向きは)、あやしうしどけなく(異様に散らかって)、もののきよらもなくやつして(掃除もせず汚れ放題で)、いと埋れいたくもてなしたまへるを(すっかり塞ぎ込んでいらっしゃるのを)、*玉を磨ける目移しに(大将は玉を磨いた美しさの六条院と見比べると)、心もとまらねど(気落ちするが)、年ごろの心ざしひき替ふるものならねば(長年持ち続けてきた正夫人への親愛の情が無くなった訳ではないので)、心には(内心では)、いとあはれと思ひきこえたまふ(実に不憫に思い申しなさいます)。 *「玉を磨ける」は注に＜玉を磨いたように素晴らしい玉鬘の邸を見て来た目には、の意。「磨く」には、「玉を磨く」（素晴らしい）意と「目を磨く」（鑑識眼を高める）の両意が掛けられた表現であろう。＞とある。

「昨日今日の(昨日今日ほどの)、いと浅はかなる人の御仲らひだに(ごく最近に連れ添ったばかりの御夫婦仲でさえ)、よろしき際になれば(それなりに出世した者の家では)、皆*思ひのどむる方ありてこそ見果つなれ(皆寛容の精神を持って添い遂げるものだ)。いと身も苦しげにもてなしたまひつれば(ただそれにしても、余りに体調が辛そうになさっていらっしゃったので)、聞こゆべきこともうち出で聞こえにくくなむ(家事管理者のあなたには、事前にお伝えすべき事柄も言い出せなかったのです)。 *「おもひのどむ」は＜穏やかな考え方をする、寛大に考える＞で、今なら、性格の違う個体同士が協同して子育てをするのだから多少の行き違いは互いに思い遣ろう、みたいな意味になりそうだが、此処で大将が言う意味は、出世した者の浮気は男の甲斐性だから生活の面倒を見て貰っている女はいちいち文句を言うな、ということだ。いや、今でもそういう立場の男は、場合によっては女も、同様の考え方をするものだ。問題はあるのだが、正味の話、何が何処まで替えが利くのか、という現実の投影だ。

年ごろ契りきこゆることにはあらずや(長年夫婦の縁を重ね申してきた仲ではありませんか)。世の人にも似ぬ御ありさまを(普通の人とは違うあなたの御豹変ぶりでも)、見たてまつり果てむとこそは(最後までお世話申そうというように)、ここら思ひしづめつつ過ぐし来るに(私は気を取り直して過ごして来たのですから)、えさしもあり果つまじき御心おきてに(あなたはそのようには添い遂げられないとの御心積りをして)、*思し疎むな(私を軽蔑なさいますな)。　*「おぼしうとむな」の語感は、私には＜軽蔑なさるな＞に聞こえるが曲解だろうか。「おもひうとむ」は＜親しからず思う、厭に思う＞と古語辞典にある。「うっとうしい、うとましい」は現代語に引き継がれていて、厭だから避けたい、遠ざけたい、いやむしろ、遠ざかりたいし、遠ざかる、という意味だ。ところで同じ＜遠ざかりたい＞でも、優れた相手の重圧を避けたい場合は＜気が引けるので遠慮したい＞のだから、古語で言えば「いとほし」や「恥づかし」になりそうだ。「うとし」は自分の迂闊さで気が回らない、気が利かない、気が付かない、という語感でもあるが、その場合に自分を卑下する、自分が謙遜する立場に立つ、という裏返しで、相手を「うとし」と思う場合は相手を同等以下に見ている、ないし見做せることを前提にしているように思える。「うと」の「う」は＜うたた・うち・うつつ・うて＞の唐突感、出し抜けの出会い頭という感じ。それを「と」と手で遮って遠ざける語感には、神聖な尊さに思わず畏まって引き下がる謙虚さは無い、とかね。

*幼き人びともはべれば(幼い子供たちもいるので)、とざまかうざまにつけて(何かにの節句事につけても)、おろかにはあらじと聞こえわたるを(母親を大切にするようにと申し聞かせて参ったものを)、女の御心の乱りがはしきままに(女の世間知らずな了見の狭いお考えから感情の高ぶるままに)、かく恨みわたりたまふ(あなたは、こうして私を恨み続けなさる)。ひとわたり見果てたまはぬほど(私の他の女への処遇を、一通り見極めなさるまでは)、さもありぬべきことなれど(私があなたを正妻として大事にし続けるという意向を確かめようもないのなら、それも仕方の無いことかも知れないが)、*まかせてこそ(そこを信じて)、今しばし御覧じ果てめ(今しばらく静観なさって頂きたい)。　*「をさなきひとびと」は注に＜後文によれば、姫君一人、男君二人と見える。＞とある。後文前読は避けたいところだが、こうした環境情報がこの物語では少な過ぎる。背景があってこそ人物描写が深まる、とは思うので、むしろ作者にもう少し詳しい背景描写を望みたい。それに、この作者はそれらを簡潔に記す名人に思えるような箇所も、前に幾つか在ったようにも思う。この文は分かり難い言い回しこそ少ないものの、私なりに意味を忖度して補語したが、そのようにして読み手の責任を果たさないと、文意が通らない。　*「まかせてこそ、今しばし御覧じ果てめ」は係助詞「こそ」を受けた文末が要求の助動詞「む」の未然形「め」で結ぶ、係り結び文型の言い回し。「まかせて」は「任す(信頼して託す)」に条件提示の接続助詞「て(～をしてみて)」が付いたものだが、この「こそ」は＜任せてみることが肝心だ＞という意味には違いないとしても、「任せてこそ浮かぶ瀬もあれ」のような＜任せてみることでこそ＞という条件を補強する意味で下に繋がるのではなく、話者の力点を示す＜今こそ、正にそこを＞という副詞のような意味だ。

宮の聞こし召し疎みて(父宮がこの話をお聞きなさって私を嫌悪して)、さはやかにふと渡したてまつりてむと思しのたまふなむ(あっさりと性急にあなたに里帰りして頂こうと考え仰るという事こそが)、かへりていと軽々しき(却ってひどく短慮と言うべきです)。まことに思しおきつること*にやあらむ(本気でそうお決めなさったことではなく)、しばし*勘事したまふべきにやあらむ(少し私に反省させなさろうという真意に違いない)」　*「にやあらむ」は推察の言い方で＜なのだろう＞だが、反語・疑問の係助詞「や」が含まれることによって、断定ではなく可能性を述べただけ、という言い方になる。だから、この言い方が列挙されれば＜～かも知れないし、～かも知れない＞とか＜～ではなく、～だろう＞とかの意味が文脈から示される。此処では後者の意味に読めるが、問題はその、どうにも他人事のような無責任

な言い方に聞こえる、ということの方らしい。面倒を起こした張本人の弁とは思えない大将の無自覚こそが正妻の勘に障るのだろう。　*「勘事(かうじ)」は＜とがめて遠ざけること。また、不興を買って、遠ざけられること。＞と大辞泉にある。前にもノートしたが、「勘定」は予め設けた基準値に照らして物事の正否を判断するという概念だから、大将の性格が気に入るかどうかではなく、その言動が倫理に照らして間違っているという言い方で＜反省を求めること＞と言い換えた。

と、うち笑ひてのたまへる(大将は大したことでも無いように事を収めたいのか、殊更冗談めかして笑って仰る)、*いとねたげに心やまし(自分の裏切りを棚に上げて、父宮の親心までからかうとは、本当に気に障って恨みが募る)。　*「いとねたげに心やまし」は注に＜『集成』は「北の方の心を書いたもの」とある。語り手が北の方の立場になって気持ちを語ったところ。＞とある。が、むしろ是は女君の内心文で、その恨みが物の怪を呼び込むほどにうっ積する思いに読者を寄り添わせる為に、例えば「とぞ」だけを付け加えても客体描写になってしまうことを、作者は避けたのだろう。

［第三段　鬚黒、北の方を慰める（二）］

*御召人だちて(大将殿の御情婦として知られて)、仕うまつり馴れたる*木工の君(夜の御用をお勤めして情を通じた女房の木工の君や)、*中将の御許などいふ人びとだに(中将の御許などという者たちでさえ)、*ほどにつけつつ(大将が他の女に熱を上げることに付いては、程度の違いはあるものの)、「やすからずつらし(自分の立場が不安で心細い)」と思ひきこえたるを(と思い申すものを)、北の方は(まして北の方は)、うつし心ものしたまふほどにて(正気でいらっしゃる時だったので)、いと*なつかしううち泣きてゐたまへり(とても穏やかに涙ぐんで座って殿の話を聞いていらっしゃいます)。　*「おほんめしうど」と「召人」に「御」が付くのは、いくら主人お目見えの上臈とはいえ侍妾自身に対する敬称ではなく、主人の所有物という意味で大将に対する敬称だ。「だつ」は＜～のようだ＞という接尾語と古語辞典にあるが、動詞の「立つ」が状態を示す助動詞のように使われていると見て良さそうだ。「立つ」は＜起きる、起こる、始まる＞などでもあるが＜表面に出る、表面に出す、広く知らせる、評判になる＞ともあり、此処では＜～として知られる＞の意かと思う。ところで、「召人」は注に＜妻に準じる待遇の鬚黒の女房。＞とあるが、古語辞典には＜侍妾＞とあり、この物語でも既に数名登場もし、特に末摘花巻の大輔の命婦は圧巻だったが、女房身分の情婦である事は確かだ。基本的に主人お目見えの上臈なので血筋や家柄は其相応の出自で、位としての身分は低くは無いものの、主人が自分の立場に於いて、その女の後見者である親や兄弟の勢力を頼みとする場合は邸の女主人たる妻として迎え、そうで無い場合は局に部屋住みさせる、という全くの政治事項だ。その意味では、紫の上の処遇は破格中の破格だ。源氏殿が臣籍降下をしていなければ、政治力学上決して許される配置ではなかっただろうが、殿は君の幼い時から世話したので、まるで身内の子を妻にしたような形になり、味方も作らないが敵も作らないという稀な立場に殿を立たせる設定となっている。　*「もくのきみ」という呼称から類推されること。「木工頭(もくのかみ、木工寮の長官)」辺りの縁者。「木工寮(もくれう)」は＜宮殿の造営・材木採集をつかさどり、大工以下の職工を支配する役所。二条の南、神泉苑の東にあった。＞と古語辞典にある。土木建築の管理と建築技能者の統括は武器の管理と警察統括に次いで国家権力の実体を示すものなのだろう。ただ、武力にも訓練は必要だが、建設技能は師弟関係で人格形成を伴って伝承されるので、技能者の独立性は軍人や警官よりもはるかに高く、集団の組織管理が命令系統の規律性ではなく事業ごとの合議性によることが、多様な個人を許しそうだ。　*「ちゅうじゃうのおもと」は近衛中将になったことがある者の縁者、だろうか。軍人家なので何かに絡んだ徒名ということもあるのかも知れない。　*「ほどにつけつつ」は＜程度はそれぞれだが＞だが、この語用は、この文全体の意図を滲ませている。召人たちでさえ不安に思うのだから、まして正妻の心中は穏やかではない、という文意が、し

かし正妻は正気なので穏やかだった、という語り口は、この召し人たち自身が正妻の物の怪憑依の原因となったことがある事を暗示し、尚且つ今回はそれらとは比べ物にならない程の、正妻の座を脅かすほどの重圧が、今正に北の方に押し掛かり続けて、憑依を呼び起こしつつある、という静かに緊張が高まる場面表現だ。　*「なつかしう」は＜親しみがもてる態度で＞だろうが、此処では「うつし心ものしたまふほどにて（正気でいらっしゃったので）」を受けているので＜穏やかに、静かに＞だ。

「みづからを（わたくしを）、ほけたり（呆けている）、ひがひがし（僻んでいる）、とのたまひ（と仰って）、恥ぢしむるは（辱めるのは）、*ことわりなることになむ（確かに御尤もです）。宮の御ことをさへ取り混ぜのたまふぞ（ですが、父宮の御言まで取り上げて仰るのは）、漏り聞きたまはむはいとほしう（お耳に入れるに偲び無く）、憂き身のゆかり*軽々しきやうなる（出来の悪い娘の私の所為で御身分に傷が付きましょう）。耳馴れにてはべれば（私の悪口は聞き慣れておりますので）、今はじめていかにもものを思ひはべらず（今さら何とも思いません）」　*「ことわりなることになむ」の「なむ」は対象を特定する格助詞「に」があるので、下に「思ひ侍る」などが省略された強調の係助詞かと思う。ということは、この「になむ」は普通に＜～になると思う＞ではなく＜～になる訳です＞と言っている。その＜～＞の内容は＜自分が惚けてひねくれていると見えるのも「ことわりなること（理由があること）」＞なのだから、これを敢えて強調して認識するということは＜残念ながら認めざるを得ない＞という悔しさを滲ませる。実は同様の言い方は現代語にもある。「確かに御尤もです」は、ある問題の理由について認識を共有したことを強調するもので、その理由が自分の責任だという非を認める言い方だ。　*「軽々しき」は注に＜皇族の身にとって軽々しい、すなわち、傷がつくようだの意。＞とある。

とて、うち背きたまへる（顔を背け為さる）、らうたげなり（お労しい）。

いとささやかなる人の（北の方はとても小柄な人で）、常の御悩みに痩せ衰へ（いつもの気の御病いの為に痩せ衰え）、*ひはづにて（ひ弱になって）、髪いと*けうらにて長かりけるが（髪がとても美しく長かったのが）、わけたるやうに落ち細りて（分け取ったように抜け落ちて少なくなり）、削ることもをさをさしたまはず（櫛で梳かす事も滅多に為さらず）、涙にまつはれたるは（その端が涙で顔に纏わり付いているのは）、いとあはれなり（本当に哀れです）。　*「ひはづ」は＜ひ弱＞。*「けうら」は「清ら」の音便。

こまかに匂へるところはなくて（此処が特に美しいというのではなくて）、父宮に似たてまつりて（父宮に似ていらして）、なまめいたる容貌したまへるを（上品な顔立ちをしていらっしゃるものを）、もてやつしたまへれば（このように疲れ果てた姿をしていらしては）、いづこのはなやかなるけはひかはあらむ（何処にかつての華やかさが在りましょうや）。

「宮の御ことを（宮様に付いて）、軽くはいかが聞こゆる（軽んじるなど如何して申せましょう、）。恐ろしう（何と畏れ多い。）、人聞きかたはにな（人聞きの悪いことなど）、のたまひなしそ（仰いますな）」と*こしらへて（などと大将は北の方を宥めて）、　*「こしらふ」は＜宥める、取り成す、取り繕う＞と古語辞典にある。

「かの通ひはべる所の（今通っている女の所の）、いとまばゆき玉の台に（それは眩しい玉の御殿の六条院に）、うひうひしう（もの馴れず）、*きすくなるさまにて出で入るほども（堅苦しい身

なりで出入りするのも)、かたがたに人目たつらむと(多くの人目に立つだろうと)、かたはらいたければ(決まりが悪いので)、*心やすく移ろはしてむと思ひはべるなり(遠慮しなくて良いように女の方をこの邸に移してしまおうと思ったわけです)。　*「きすく」は＜(形動ナリ)まじめで飾り気のない様子。堅苦しい。きまじめ。「きすぐ」とも。＞と古語辞典にある。　*「心やすく移ろはしてむ」が北の方に対して説得力のある言い訳になるようには思えないが、姫に対して敬語使いをしていない言い方から、あくまでも新しい女は愛妾に過ぎないということを言ってはいるのだろう。

太政大臣の(源氏殿の)、さる世にたぐひなき御おぼえをば(あのように世に比類無い高い御声望を)、さらにも聞こえず(今さら言うまでもなく)、心恥づかしう(気が引けるほど)、いたり深うおはすめる御あたりに(万事行き届いて整然としていらっしゃる六条院に)、*憎げなること漏り聞こえば(あなたが姫君を憎んでいるという話が漏れ聞こえては)、いとなむいとほしう(随分と不都合で)、かたじけなかるべき(恐縮すべき不始末になってしまいます)。なだらかにて(あなたは姫君に穏やかに接して)、御仲よくて(御仲を良くして)、*語らひてものしたまへ(親しく交わってください)。　*「憎げなること」は注に＜北の方と玉鬘との不和の噂。＞とある。が、訳文には＜よくない噂＞とある。「憎げ」という語を一般的な＜好ましくない状態＞と取った上で、そう「なること」の内容を＜不和の噂＞だろうと読み手が類推した、ということらしい。が、「憎げ」という語を上品に一般論として妻に話す意味はあるのだろうか。私は＜あなたが憎んでいる様子＞と言ってしまいたい。　*「語らふ」は＜話を語る＞でもあるが、そのようにして＜親しく交わる＞ことをも言う、と古語辞典にある。

宮に渡りたまへりとも(あなたが宮邸に里帰りなさっても)、忘るることは*はべらじ(私はあなたを忘れるものではない)。とてもかうても(だから、里帰りしようとしまいと)、今さらに心ざしの隔たることはあるまじけれど(今さら私のあなたへの気持ちが疎遠になることはないのだが、それでもあなたの里帰りは)、世の聞こえ人笑へに(世間の噂や悪口に上って)、まろがためにも軽々しうなむはべるべきを(私にとっても体裁の悪いものだから)、年ごろの契り違へず(長年の誼を変えること無く、此処で一緒に暮らして)、かたみに後見むと(互いに助け合っていこうと)、思せ(お考え下さい)」　*「はべらじ」の「じ」は打消しの助動詞で、「はべり」の未然形(未然のことに対する推量や意志を意味する語尾変化)の語尾「ら」に付いた「らじ」は、此処では自己の言動なので推量ではなく意思表明だ。

と、こしらへ聞こえたまへば(大将は取り成し申しなさると)、

「人の*御つらさは(あなたが為さった今回の身勝手さが)、*ともかくも知りきこえず(世間でどう言われているかは知ったことではありません)。世の人にも似ぬ身の憂きをなむ(世離れした我が身の物の怪憑依の無念さを)、宮にも思し嘆きて(父宮も情けなく御思いになって)、今さらに人笑へなることと(里帰りで改めて悪口が立つことと)、御心を乱りたまふなれば(お心を煩わし為さるだろうから)、いとほしう(それが懸念されて)、いかでか見えたてまつらむ(如何してお目に掛かれようか)、となむ(ということで帰りたくないのです)。　*「つらさ」は＜薄情さ、思いやりの無さ＞とあるが、語感を近づければ＜連れなさ、冷たさ＞くらいだろうか。しかし、此処で言われていることは＜大将の起こした色恋沙汰＞のことであり＜その身勝手さで周りが被った迷惑＞だから、むしろその文意に添いたい。　*「ともかくも」は大将の言った「世の聞こえ人笑へに」に対する夫人の答え、かと思う。「知りきこえず」は＜存じ上げない(知り聞こえ侍らず)＞という状態の言い方ではなく、「知らず(知る心算は無い)」という意思表示の丁寧語としての補助動詞の「聞こゆ」に聞こえる。

大殿の北の方と聞こゆるも(太政大臣の奥方と申し上げる方も)、異人にやはものしたまふ(他人などではいらっしゃいません)。かれは(あの方は)、知らぬさまにて生ひ出でたまへる人の(私とは面識なく他家でお育ちなさった人で)、末の世に(今になって)、かく人の*親だちもてないたまふつらさをなむ(このように私の婿であるあなたの新妻となる姫を親の立場で介添えなさる不都合を)、*思ほしのたまふなれど(父宮は情けない因果とお思い為さって奥方を悪くも仰いますが)、ここにはともかくも思はずや(私には別にどうということとも思われません)。*もてないたまはむさまを見るばかり(奥方がどういうお顔で介添えなさるのかが見物なだけです)」　*「親立つ」は＜紫の上が玉鬘の親代わりとなって結婚の世話をすることをいう。＞と注にある。 *「思ほしのたまふなれど」は注に＜「なれ」（伝聞推定の助動詞）。父宮はおっしゃるようだが。＞とある。この主語は、私にはとても分かり難い。文意と敬語から、なるほどとは思うが、「なれ」だけで父宮を直感し、この原文のままで臨場感に浸れるほどの読解力はとても持ち合わせていない。 *「もてないたまはむさま」の主語は「大殿の北の方」に違いない。直前の＜奥方が姫を介添えする＞という意味を踏襲してこその、短い言葉で多くを語ろうという言い方なのだろう。父宮は妹が姉の親の立場になるという、異腹ながらも娘たちの穏当でない因果を気にしていらっしゃるようだが、姉の私は無力にして事態を静観するしかない。と後は、奥方自身がこのことをどう思っていらっしゃるのか、その心根には興味がある、と突き刺すような冷めた視線を紫の上に向ける憑依がかった言い方、に見える。

とのたまへば(と夫人がお応えなさるので)、

「いとようのたまふを(よくも其処まで仰るとは)、例の御心違ひにや(例の御乱心ではないのか)、苦しきことも出で来む(このままでは拙いことにもなり兼ねない)。大殿の北の方の*知りたまふことにもはべらず(今度のことは源氏殿の奥方がご関与なさることではない)。いつき女のやうにてものしたまへば(あの方は殿の箱入り娘のように育ちなさった方で)、かく*思ひ落とされたる人の上までは知りたまひなむや(このように私などの女に思い落とされた者の身の上まではご存知為さるまい)。人の御親げなくこそものしたまふ*べかめれ(およそ親御らしいところなどは無くいらっしゃるようだ)。かかることの聞こえあらば(そのような宮や其方のこだわりが先方の耳に入っては)、いとど苦しかるべきこと(相当拙いことになる)」　*「知りたまふ」は注に＜「知る」は単に知っているという意でなく、関知し指図する意。紫の上が関知し指図したことではありません。＞とある。 *「思ひ落とされたる人」は注に＜玉鬘をさす。自分の結婚相手を卑下した言い方。＞とある。 *「べかめれ」は注に＜「べか」（推量の助動詞、推量）「めれ」（推量の助動詞、視界内推量）、鬚黒の体験から判断して「～でいらっしゃるようだ」。＞とある。

など(などと大将は)、日一日入りゐて(一日中夫人の部屋に居座って)、語らひ申したまふ(説得なさいます)。

［第四段　鬚黒、玉鬘のもとへ出かけようとする］

暮れぬれば(日が暮れると)、心も空に浮きたちて(大将は心も浮き立って)、いかで出でなむと思ほすに(何とかして六条院へ出掛けたいとお思いになるが)、雪*かきたれて降る(雪が幕を垂らすように空を暗くして降る、)。かかる空にふり出でむも(こんな天気の悪い日に出掛けるのも)、人目いとほしう(随分物欲しげで体裁が悪く)、この御けしきも(この妻の御機嫌でも)、憎げに*ふすべ恨みなどしたまはば(悪態をついて嫉妬でも為されば)、なかなかことつけて(却ってそれ

を口実に)、*われも迎ひ火つくりてあるべきを(とても居られたものじゃないと、こちらも煽られたのが是幸いと出掛けられるのだが)、いとおいらかに(妻はとても穏やかに)、つれなうもてなしたまへるさまの(夫の浮気など気にしていないようにしていらっしゃる様子が)、いと心苦しければ(逆に気詰まりなので)、いかにせむ(どうしたものか)、と思ひ乱れつつ(と決心もつかずに)、格子などもさながら(格子雨戸も下ろさないままで)、端近ううち眺めてゐたまへり(窓際で物欲しそうに外を眺めて座っていらっしゃいました)。　*「掻き垂る」は＜空を真っ暗にして＞と訳文にある。「掻く」は「水を掻き分ける」などのように、雑然とした状態に手を入れて整然と整える、ような語感で、一様にならす、辺り一面一色になる、ということか。「垂る」は＜垂れる＞だから＜空から幕が垂れてくるように＞なのだろう。なお、注には＜前に「霜月になりぬ」とあった。季節は冬である。雪が空をまっくらにして降る様子が描写される。＞とある。　*「ふすぶ」は「燻ぶ」で＜燻ぶる、煙が立つ＞で、大辞泉に＜《相手に煙たい思いをさせる意から》責めたてる。また、嫉妬(しっと)する。＞ともある。文意は＜嫉妬＞だが、言葉遊びとしては妻の「ふすぶ(煙が燻ぶる)」に対して下に「われも迎ひ火つくりて」という言い回しで洒落ている、と注にある。　*「われも迎ひ火つくりて」は注に＜『日本書紀』巻第七に倭建命が相模野で迎え火をつけて難を逃れた故事がある。こちらから対抗して。＞とある。「対抗して」というよりは、相手が燻ぶらせた火に煽られたのを幸いに此方は大火を起こす、だからカウンター・アタックで、相手の攻撃を逆手に取った逆襲だ。

北の方けしきを見て(夫人はその様子を見て)、

「あやにくなめる雪を(あいにくな雪模様を)、いかで分けたまはむとすらむ(どう踏み分けて行き為さろうとするのかしら)。夜も更けぬめりや(そうしていては、夜も更けてしまうでしょうに)」

とそそのかしたまふ(と大将に外出を勧め為さいます)。「今は限り(もう是までだ)、*とどむとも(止めてみても)」と思ひめぐらしたまへるけしき(と思い廻らしていらっしゃる姿が)、いとあはれなり(とてもしみじみと物悲しい)。　*「とどむとも」は注に＜「いかならむ」などの語句が省略されている。鬚黒の気持ちはもう元には戻るまいという諦めの気持ち。＞とある。

「かかるには(こんなひどい雪では)、いかでか(どうにも)」　*注に＜鬚黒の詞。「え出でむ」などの語句が省略されている。このようにひどい雪ではどうして出掛けられようかの意。＞とある。実際に会話に於いては、即ち現場なので、当事者間での対象認識の共有を前提に述辞だけで論じ合うことこそが意識の集中を意味し誤解を防ぎ、協調力を生む。斯かる場面で対象を変に客体視した言い方をすると、例えば一般論などの、別の対象認識との混同を引き起こしかねない。確かに言葉は個体や小集団を超えてヒトという生命体として共有し得る想念の記号化なので、人間は引いた立場の大きな視点で物事を組織的に考えることが出来るし、そうして複雑な大組織を構築し、以って個人や小集団では攻し切れない世界を切り開いてきた。そして、その際には客観的に一つ一つの対象を全体の中でどう位置付けるかを、当該事物の現出時の問題解決とは別の視点での別の認識対象として取り決めなければならないが、同時に世界に終りは無く、日々新たな現場での目下の問題解決は全てが現場当事者の能力に委ねられている。だからこそ、言葉は生きている。

とのたまふものから(と大将はお応えなさるものの)、

「なほ(しかし)、*このころばかり(婚儀を挙げて間もない此処当分の内はやはり、)。心のほどを知らで(私がどれほど姫を大事に思っているかが分からず)、とかく人の言ひなし(とかく人が噂して)、大臣たちも(実父と養父の両大臣も)、左右に聞き思さむことを憚りてなむ(政略本意なのか人物本意なのか私の真意を量りかねなさることになっては申し訳なく)、とだえあらむはいとほしき(通いが途絶えて、私が計算づくではなく真心で動く男だと御思い頂けないとしたら心外です)。　*「このころばかり」は注に＜以下「思ひきこゆる」まで、引き続き鬚黒の詞。結婚したばかりのころ。＞とある。

思ひしづめて(ただ、あなたの正妻の立場は変わらないのだから、気を落ち着けて)、なほ見果てたまへ(もう少し見守っていて下さい)。ここになど渡しては(姫を此方に迎えてしまえば)、心やすくはべりなむ(そんな気遣いも要らなくなります)。かく世の常なる御けしき見えたまふ時は(こうしてあなたが普通の御状態に見えなさる時は)、ほかざまに分くる心も失せてなむ(他の女に目を向ける気も失くなって)、あはれに思ひきこゆる(愛しく思い申します)」

など、語らひたまへば(お話しなさると)、

「立ちとまりたまひても(此処にいらしても)、御心のほかならむは(御心が他に有るのでは)、なかなか苦しうこそあるべけれ(却って悲しくなります)。よそにても(余所に居ても)、思ひだにおこせたまはば(私を思い出して頂けるなら)、*袖の氷も解けなむかし(独り寝に泣いて冬の寒さに凍った袖の涙も解けることでしょう)」　*「そでのこほり」は注に＜『奥入』は「思ひつゝねなくに明くる冬の夜の袖の氷はとけずもあるかな」（後撰集冬。四八二、読人しらず）＜あの人を思いながら泣き明かした冬の夜は涙に濡れて凍った袖も解けないままであることよ＞を指摘し、現在の注釈書でも指摘する。＞とある。

など、なごやかに言ひゐたまへり(夫人は和やかに応えていらっしゃいました)。

［第五段　北の方、鬚黒に香炉の灰を浴びせ掛ける］

*御火取り召して(夫人は香炉を女房に用意させて)、*いよいよ焚きしめさせたてまつりたまふ(夫の外出に際しての身だしなみとして衣服に香を焚き染めさせ申しなさいます)。　*「火取り」は＜香炉を銅の網かごで覆ったもので、そこに衣服を掛けて香を焚き染ませる＞とあり、古語辞典には参照図も示されている。　*「いよいよ」は＜正にその時に、その時に際して＞。

みづからは(夫人自身は)、萎えたる御衣ども(着古した御着物を)、うちとけたる御姿(無造作に着ていらっしゃるお姿が)、いとど細う(ますます小さく)、か弱げなり(弱弱しい)。*しめりておはする(力無く沈んでいらっしゃるのが)、いと心苦し(とても労しい)。御目のいたう泣き腫れたるぞ(御目が酷く泣き腫れているのは)、すこしものしけれど(いささか疎ましいが)、いとあはれと見る時は(それも健気なと思えば)、罪なう思して(大将はこの女に罪があるわけでも無いと御思いになって)、　*「湿る」は＜衰える、しめやかだ、思い沈む＞と古語辞典にある。

「*いかで過ぐしつる年月ぞ(何と長いこと二人で連れ添ってきた年月だったことか)」と、「名残なう移ろふ心のいと軽きぞや(それをまた少しも顧みず他の女に浮気する心の何と頼りないことか)」とは思ふ思ふ(などと彼是考えながらも)、なほ心懸想は進みて(やはり姫への恋慕は募っ

て)、そら嘆きをうちしつつ(まるで止むを得ない事情で出掛けなければならないかのように、わざと溜息を吐いては)、なほ*装束したまひて(それでも外行きに着替えは済ませなさって)、小さき火取り取り寄せて(小さな香炉を手に取って)、袖に引き入れてしめゐたまへり(袖に引き入れて焚き染めていらっしゃいました)。　*「いかで」は「いかにとて」で、その形容動詞の「いかに」が＜理由や方法＞を意味する時は接続助詞の「とて」は＜疑問や反語＞を示し、「いかに」が＜事物の程度＞を意味する時は「とて」は＜願望や感嘆＞を示す、かと思う。　*「しゃうぞく」は単に衣服を着ることではなく＜正装すること、外出の身支度＞と古語辞典にある。

なつかしきほどに萎えたる御装束に(大将は程良く着慣らした御直衣姿に)、容貌も(顔立ちも)、*かの並びなき御光にこそ圧さるれど(かの並びなき源氏殿の御光にこそ及ばないが)、いとあざやかに男々しきさまして(とてもくっきりとした男らしい凛々しさで)、ただ人と見えず(並の貴族とは違う)、*心恥づかしげなり(ご立派さです)。　*「かのならびなきおほんひかり」は注に＜源氏の美しさを譬喩していう。＞とある。　*「心恥づかし」は＜此方が気後れすほど相手が優れている＞で、話者である女房が＜気後れすほど大将が優れていらっしゃる＞のだから＜(大将が)御立派だ＞だ。

*侍に(さぶらひに、玄関脇の侍所で)、人びと声して(供人たちが出発の頃合いを見計らう声を出して)、　*「侍」は注に＜名詞。侍所のこと、供人の詰所。＞とある。

「雪すこし隙あり(雪が小止みになりました)。*夜は更けぬらむかし(もうだいぶ夜が更けて来たようですが)」　*「夜は更けぬらむかし」は注に＜「ぬ」（完了の助動詞、確述）「らむ」（推量の助動詞、視界外推量）「かし」（終助詞、強調）。夜が更けてしまいましょうの意。＞とある。が、「らむ」は(視界外推量)だけではなく、視界内事態の意味を推量する、とも古語辞典にはある。また、「かし」は＜念押し＞と説明されるが、必ずしも同意を促すものでも無く、基本は認識の再確認なので、懸念を強調している場合もあるだろう。そして、此処の言い方は＜殿が外出するには遅れ気味だ＞という意味を供人の立場で＜推量している＞のであり、供人は決して＜早く出掛けないと夜が更けてしまう＞などと主人を急かせる言い方はしないものだ。

など、さすがにまほにはあらで(奥方の手前さすがに新妻のところへの出立の準備が出来ましたと真正面切った言い方ではなく)、そそのかしきこえて(それとなく出発を促し申上げて)、*声づくりあへり(わざと咳払いし合っていました)。　*「こわづくる」は＜何かを気付かせる標にわざと咳払いする＞と古語辞典にある。

中将、木工など(中将の御許や木工の君などの女房たちは)、「*あはれの世や(身につまされる愛憎模様だこと)」などうち嘆きつつ(などと愚痴をこぼしながら)、語らひて臥したるに(この有様を話題にしては自分の部屋に下がって床に入っていたが)、*正身は(後に一人残された夫人ご本人は)、いみじう思ひしづめて(とても静かに)、らうたげに寄り臥したまへりと見るほどに(従順そうに脇息に寄り掛かっていらっしゃったかと思うと)、　*「あはれの世や」は注に＜中将の御許や木工の君など感慨。北の方への同情。「世」は鬚黒と北の方の夫婦仲をいう。＞とある。この場に居合わせた、ないし遠巻きに見ていた他の上臈なら、「北の方への同情」なのかも知れないが、中将や木工などの召人なら、この場面はとても＜他人事は思えない切実さ＞があった筈だ。また、「世」は「夫婦仲」というよりは＜この場面に見る世相＞であり＜目の前で繰り広げられた愛憎劇＞なのだろう。　*「正身(さうじみ)」は＜その人、本人、当人＞とあるが、今までのこの語の使い方からして、周囲の人々が去った後で＜そして当人は＞という語感、かと思う。

にはかに起き上がりて(俄かに起き上がって)、大きなる籠の下なりつる火取りを取り寄せて(大きな籠の下になっている香炉釜を手に取って)、殿の後ろに寄りて(殿の後ろに近寄ると)、さと*沃かけたまふほど(さっとその灰を浴びせ掛け為さるその早さたるや)、人の*ややみあふるほどもなう(大将はおやと異変に気付いて避ける間も無く)、あさましきに(ひどい有様になって)、あきれてものしたまふ(呆然としていらっしゃる)。　*「ややみあふる」は注に＜『集成』は「「ややみ」「あふる」と複合動詞と見るべきであろうが、語義不詳。「ややむ」は驚きあるいは呼び掛けの語「やや」を活用させたものか。「あふる」は煽るか。「やや見敢ふる」と見るのは無理であろう」と注す。『完訳』は「「見敢ふ」で見届ける意。人の目にもとまらぬ瞬時の出来事」と注す。＞とある。定説が無いなら、尤もらしいことを言った者勝ち、みたいな所も有りそうだ。「ややむ」は＜悩む、病む＞と古語辞典にあり、この説明は語感上の説得力もある。でも、「ややむ」を＜オヤっと異変に気付く＞言葉と考えてみても＜悩む、病む＞に反することも無い。「あふ」は「敢ふ」で＜耐える、抗し切る＞。「る」は可能の助動詞。で通せば、「ややみあふる」は＜オヤっと異変に気付いて災難を避けることが出来る→危機回避出来る＞という意味、というのはどうだろう。　*「沃かく」は＜注ぎ掛ける、浴びせ掛ける＞と古語辞典にある。「沃る(いる)」は＜注ぐ、浴びせる＞。「沃(よく)」は「肥沃(栄養素の豊富な土壌)」などとも使われるが、＜被せる＞語感だろうか。

さるこまかなる灰の(その細かな灰が)、目鼻にも入りて(目や鼻にも入って)、*おぼほれてものもおぼえず(涙にむせて訳が分からない)。払ひ捨てたまへど(大将は払い除けなさったが)、立ち満ちたれば(灰が煙のように立ち込めていたので)、御衣ども脱ぎ*たまひつ(御召し物類をお脱ぎ為さってしまいました)。　*「おぼほる」は「溺ほる」で＜水中に沈む。転じて、おぼれる。＞とあり、更に近年の例示で＜涙にむす＞とあり、また「惚ほる」で＜放心する。ぼんやりする。＞とも大辞泉にある。　*「たまひつ」の「つ」は意志動作の完了を示す助動詞で＜～なさってしまった＞。

うつし心にてかくしたまふぞと思はば(正気でこのようなことを為さる方なのだと判じたならば)、またかへりみすべくもあらずあさましけれど(重ねてはお世話できないと呆れるが)、「例の御もののけの(これは例の物の怪が)、人に疎ませむとするわざ(人を気味悪がらせようとする仕業なのだ)」と、御前なる人びとも(側仕えの女房たちも)、いとほしう見たてまつる(夫人にご同情申し上げます)。

立ち騒ぎて(大急ぎで)、御衣どもたてまつり替へなどすれど(別のお召し物を用意し殿にお着替えして頂いたが)、そこらの灰の(辺り一面の灰が)、鬢のわたりにも立ちのぼり(冠の下の鬢にまで降り懸かって)、よろづの所に満ちたる心地すれば(すっかり灰塗れになった気がするので)、*きよらを尽くしたまふわたりに(整然と為さっている六条院に)、さながら参うでたまふべきにもあらず(このまま参上なさることは出来ませんでした)。　*「きよらを尽くしたまふわたり」は注に＜六条院の玉鬘の所を指していう。＞とある。「尽くしたまふ」の主語は源氏殿か姫か良く分からない。

「心違ひ(こころたがひ、正気では無い)とはいひながら(とは言っても)、なほめづらしう(こんなことは、未だかつて無かった)、見知らぬ人の御ありさまなりや(考えられない妻の御変わり様だ)」と爪弾きせられ(毛嫌いされて)、疎ましうなりて(疎ましくなり)、あはれと思ひつる心も残らねど(愛しく思ってきた気持ちも残らなかったが)、「このころ(此処で)、荒立てては(事を荒立てては)、いみじきこと出で来なむ(不都合なことになりかねない)」と思ししづめて(と大将は気を落ち着けて)、夜中になりぬれど(夜中になってしまったが)、僧など召して(僧などを呼

び寄せて)、加持参り騒ぐ(魔除けの祈祷儀式を詣でる騒ぎとなりました)。呼ばひののしりたまふ声など(僧の念力で捻じ伏せられた物の怪が苦し紛れに夫人をして大将を罵倒なさって上げる大きな叫び声などは)、思ひ疎みたまはむにことわりなり(大将がうんざりなさるに十分でした)。

[第六段　鬚黒、玉鬘に手紙だけを贈る]

夜一夜(一晩中)、打たれ引かれ(夫人は僧たちに打たれて引き回されて)、泣きまどひ明かしたまひて(泣き喚いて夜を明かしなさっては)、すこしうち休みたまへるほどに(少しうつらと眠りなさった時に)、かしこへ御文たてまつれたまふ(大将殿は先方へお手紙を差し上げなさいます)。

「昨夜、にはかに消え入る人のはべしにより(意識を失う急病人が出まして)、雪のけしきもふり出でがたく(雪の降り具合も外出の足を振り出しにくく)、*やすらひはべしに(お訪ねしませんでしたが)、身さへ冷えてなむ(あなたに御会いできないので、この身まで凍える思いです)。御心をばさるものにて(あなたは分かって下さるでしょうが)、人いかに取りなしはべりけむ(周りの者たちがどう思うのかが心配です)」　*「やすらふ」は＜ためらう、躊躇する＞でもあるが＜立ち止まる、休む＞でもあり、此処では＜家に止まって訪問を中止する＞という事なのだろう。

と、*きすくに書きたまへり(堅苦しくお書きになりました)。　*「きすく」は「気直」と表記され＜堅苦しい、生真面目＞と古語辞典にある。

「心さへ空に乱れし雪もよに、ひとり冴えつる片敷の袖　(和歌 31-03)

「空しく嘆く雪模様、ひとり寝袖の泣き模様　(意訳 31-03)

*「冴ゆ」は＜冷える＞と＜はっきりする＞で＜寂しさを思い知る＞という言い方、なのだろう。「片敷(かたしき)」は、本来は対であるべき衣の袖のように一緒に寝るべき夫婦が＜独り寝する寂しさ＞を言うらしく、「片敷の袖」は、その寂しさから＜涙で濡らした袖＞を言うらしい。

堪へがたくこそ(辛すぎます)」

と、白き薄様に(白い光沢紙に)、*つつやかに書いたまへれど(慎ましく恐縮して畏まってお書きになっていたが)、ことにをかしきところもなし(特に着物を贈りなさるような演出の工夫はありません)。手はいときよげなり(字はとても綺麗です)。才かしこくなどぞものしたまひける(漢学の教養は高くいらっしゃるのです)。　*「つつやかに」は＜重々しく＞と訳文がある。「つつやか」は＜慎ましやか＞だろうか。手許の辞書にはない語だ。

尚侍の君(かんのきみ、尚侍の新妻は)、夜がれを何とも思されぬに(大将の夜離れを何ともお思いでないので)、かく心ときめきしたまへるを(このように心をときめかせてお書きになったお手紙でも)、見も入れたまはねば(お読みにならず)、御返りなし(お返事はありません)。男(新郎の大将は)、胸つぶれて(落胆して)、思ひ暮らしたまふ(一日中嘆きなさいます)。

北の方は(奥方は)、なほいと苦しげにしたまへば(依然として苦しそうにしていらっしゃるので)、*御修法など始めさせたまふ(大将殿は僧たちに古代インド語での加護祈祷などを始めさせなさいます)。心のうちにも(大将は自分の心の中でも)、「このころばかりだに(新婦を自邸に引き取るまでの物事が落ち着かない今の内だけでも)、ことなく(無事に)、うつし心にあらせたまへ(正気でいらして下され)」と念じたまふ(と念じなさいます)。「まことの心ばへのあはれなるを見ず知らずは(本妻の生来の気立ての愛おしさを見知らなかったとしたら)、かうまで*思ひ過ぐすべくもなき*け疎さかな(こうまで気を揉むまでも無く打ち捨てるべき気味悪さだ)」と、思ひゐたまへり(思っていらっしゃったのです)。　*「御修法」は「みしゅほふ」と読みがある。「しゅほふ」は＜古代インド語で本尊に加護を願う祈祷＞らしい。　*「おもひすぐす」は＜見過ごす、忘れる＞と＜思い悩んで暮らす＞とがある。現代語の「思い過ごし」は＜考え過ぎ、気にし過ぎ、心配しすぎ＞だが、その＜気を揉む＞語感は通じているのだろう。　*「けうとさ」は＜うとましさ、不気味さ＞。

［第七段　翌日、鬚黒、玉鬘を訪う］

暮るれば(日が暮れれば)、例の(例によって)、急ぎ出でたまふ(大将はお出掛けの用意に取り掛かりなさいます)。御装束のことなども(しかし御召し物類に付いても)、めやすくしなしたまはず(夫人の差配無しでは程良く取り揃えさせることが出来なさらず)、世にあやしう(とても変な)、うちあはぬさまにのみむつかりたまふを(ちぐはぐな取り合わせばかりで機嫌を悪く為さっていて)、あざやかなる御直衣なども(新しい上着なども)、え取りあへたまはで(仕立てを間に合わせ為されず)、いと見苦し(とても始末が悪い)。

昨夜のは(よべのは、昨夜の上着は)、焼けとほりて(焼け穴が空いて)、疎ましげに焦れたるにほひなども(気味悪く焦げた臭いがするのも)、ことやうなり(異様です)。御衣どもに移り香もしみたり(下着にその臭いも染みていました)。ふすべられけるほどあらはに(嫉妬された激しさがはっきりと分かって)、人も倦じたまひぬべければ(新妻も厭に思いなさるだろうからと)、脱ぎ替へて(大将殿は脱ぎ変えて)、御湯殿など(入浴しては)、いたうつくろひたまふ(丹念に身繕いなさいます)。

木工の君、御薫物しつつ(殿のお召し物に香を焚き染めつつ)、

「ひとりゐて焦がるる胸の苦しきに、思ひあまれる炎とぞ見し　(和歌 31-04)

「燻ぶれば 身を焦がしつつ 燃え狂う　(意訳 31-04)

*注に＜木工の君の贈歌。「ひとり」に「独り」と「火取り」を掛ける。「焦がるる」「炎」は「火」の縁語。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。＞とある。自分の感情ではなく、奥方の感情を「見し」という感想だから、お題詠みの大喜利の趣だ。

名残なき御もてなしは(愛し合った相手に少しの思い遣りも残っていないような為さり様は)、見たてまつる人だに(それを拝見する私のようなものでさえ)、ただにやは(平気では居られませんのに)」

と、口おほひてゐたる(口を隠して陰口めかして殿の側に座っているが)、まみ(眼差しは)、いと*いたし(奥方への同情と殿への非難で、とても痛々しい)。されど(しかし殿は姫のことしか眼中に無く)、「いかなる心にて(何が哀しくて)、かやうの人にものを言ひけむ(この程度の女を口説いたりしたのだろう)」などのみぞおぼえたまひける(などとだけ思いなさるばかりなのでした)。情けなきことよ(女遊びに似合わない風情の無さ、余裕の無さ、薄情さです)。　*「いたし」は＜極めて悲しい＞という意味の形容詞と古語辞典に説明されるが、その修辞対象は「まみ(目つき、目の表情)」だから、その形容としては＜悲しい＞ではなく＜険しい→痛々しい＞のかと思う。ところで、その「険しさ」は＜殿への非難＞だけでなく＜奥方への同情＞もある、とも思う。

「憂きことを思ひ騒げばさまざまに、くゆる煙ぞいとど立ちそふ　(和歌 31-05)

「燻ぶりも 思い過ごしで 立つ煙　(和歌 31-05)

*注に＜鬚黒の返歌。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛け、「くゆる」に「燻る」と「悔ゆる」を掛ける。「燻る煙」は「火」の縁語。＞とある。考え過ぎだ、で済ませたい男の気持ちは分かるような、無理なような。

いとことのほかなることどもの(こうした、本当に異常な事柄が)、もし聞こえあらば(もし先方の耳に入れば)、*中間に(ちゅうげんに、私は中途半端に)なりぬべき身*なめり(なってしまう立場なのだろうから)」　*「中間」は注に＜どっちつかずの状態。北の方は式部卿宮に引き取られ、玉鬘は源氏方から仲を裂かれるような状態。＞とある。ただ、大将殿の関心から言えば、北の方に付いては今は後の話で、源氏方から家庭内不和の懸念を理由に姫の大将家嫁入りを断られて、藤原殿も物の怪の取り付く家では取り止めに反対できずに、大将が今までの短期の通い婿で終わることを最も恐れた、と読める。　*「なめり」は＜～なのだろう＞という推量だが、「なるらむ」のような客体視でもなく、「なるべし」のような判断でもなく、「ななむ」のような意志でもなく、「ななり」の傍観でもなく、自分はその可能性を受け入れる、または受け入れざるを得ない、と覚悟していて、その立場を説明するような語感すらある、ように思う。

と(と大将は)、うち嘆きて出でたまひぬ(溜息を吐いてお出掛けなさいました)。

一夜ばかりの隔てだに(一夜ばかり会えなかっただけなのに)、まためづらしう(更に愛しく)、をかしさまさりておぼえたまふありさまに(美しさが勝って思え為さる尚侍君の姿に)、いとど心を分くべくもあらずおぼえて(大将はいっそう他の女に関心を割ける事は出来なく思えて)、心憂ければ(正気を失った奥方が煩わしかったので)、*久しう籠もりゐたまへり(ずっと六条院の尚侍の部屋に泊まり込んでいらっしゃいました)。　*「久しう」は＜長い間＞とあるが、何日ぐらいなのか、その間は出仕したのかどうなのか、当時の一般的な慣習も分からなければ、この特殊事情下での諸般の動向などは更に分からず、どういうことを言っているのかが、さっぱり分からない厭な語用だ。が、もしかすると、渋谷教授の段立ての所為で、「一夜ばかりの隔てだに」の文が段落になっているから気持悪いのかも知れない。というのは、下の文を雑観すると、その「久しう」間の出来事が記されていそうに見えて、だとすると「一夜ばかりの隔てだに」からを次の段頭にするべきもののように思える。